自分の命よりも娘：ゆりあちゃんの命を望んだ母　No.1

「生きたいのに生きることができない」、悲痛な叫び声が聞こえますか？これは難病に侵されたテレニン晃子さんが限られた命の中で、天から授かった幼い娘、ゆりあちゃん（愛称：ゆりちか）に残した愛のメッセージです。

2002 年 4 月、晃子さんは、ロシア人の男性テレニン・レオニドさんと国際結婚しました。まもなくして妊娠がわかり、二人は喜びと幸せに包まれていました。しかし、2005 年 12 月のことです。妊娠 5 か月目に入った晃子さんは突然、激しい腰の痛みに襲われました。歩けないほどの激痛。「お腹の中の子に万が一のことがあっては‥!?」と、病院で病理検査を受けました。結果は残酷なものでした。「脊髄ガン」、体全体の神経が集中する脊髄がガンに犯され、手足のしびれや知覚障害など、全身に障害が出やすく、転移の可能性が非常に高い難病です。とにかく一刻も早い治療が必要とのこと。でも、晃子さんのお腹の中には赤ちゃんがいます。放射線や抗がん剤を使う治療は、お腹の赤ちゃんに深刻なダメージを及ぼすことは必須。「あきらめなければいけません」と医師に言われたテレニンご夫婦。「難しいね、パパ」、せっかく授かったかけがいのない小さな命。自分自身の命か子どもの命か。究極の選択です。辛い選択を迫られてしまいました。「ママはパパに約束したの。パパに健康な赤ちゃんをあげるってね」、お腹の子に優しく語りかけました。そう、晃子さんは自分の命ではなく、赤ちゃんの命を守ることを選んだのです。それは、自分の死への秒読みの開始でもありました。

2006 年 2 月 6 日、無事、ゆりあちゃんが誕生しました。1200 グラムの小さな尊い命です。「この子のためにも元気にならなくちゃ！」、さっそく晃子さんは抗がん治療を始めました。病気の悪化で手を自由に動かすことができない晃子さん。愛くるしい娘をその腕に抱くことのできない切なさ。本当なら、お乳をこの子に飲ませてあげたい。しかし、抗がん剤を服用していては、お乳を飲ませることもできません。辛い治療に耐え続ける晃子さんですが、運命は過酷な方向へと進んで行きます。ＭＲＩを撮ると、ぜんぜん別の所に新しく大きな腫瘍ができていました。絶望的、自分の命の炎が燃え尽きてしまう前に、晃子さんは決意します。

「ゆりちかが笑うと本当に可愛くて、こっちも幸せになります。その笑顔をこれからもずっと見ていたいのですが、何があるか分からないので、ママがゆりちかに話したいことを書きます」、自分の体験をもとに、女の子として、人として、ゆりあちゃんに大切にしてほしいことを書き始めたのです。